

SHOW HEYシネマルーム

★★★★★

ジョンQ—最後の決断—

2002 (平成14) 年9月4日鑑賞

Data

監督：ニック・カサヴェテス

出演：デンゼル・ワシントン／ロバ

ート・デュヴァル／ジェーム

ズ・ウッズ／アン・ヘッシュ

👁️👁️ みどころ

最愛の一人息子が突然心臓疾患で倒れた。両親は危険を伴う心臓移植手術に賭けた。しかしその費用は？医療保険制度の問題点を見事にえぐり出す。息子の生命を救うために父親ジョンQ（デンゼル・ワシントンが好演）がとった「最後の決断」とは・・・？アツと驚き、そしてホツとする。そして涙するであろう名作。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

<医療保険制度のあり方は・・・>

日本はバブル崩壊後、「失われた10年」を経て、今や経済不況のまっただ中にある。そのうえ、デフレ・スパイラルという恐ろしい構造に陥っているらしい。

こんな日本だから、生命保険の（予定）利率が年々下がるだけではなく、厚生年金や医療保険などさまざまな社会保障制度も、「国民の負担は重く、しかし受益は軽く」という悪しき方向に進んでいる。

若い世代には、「どうせ年金制度など破綻するに決まっているのだから、そんなものを当てにして、安い給料から保険料を払っても仕方がない」という風潮が広がっている。そのうえ、高齢化社会は既に到来してしまった。こんな状態で今後も経済不況が進んでいけば、国民の医療（保険）制度は一体どうなるのだろうか？「国民皆保険制度」の実施によって、国民誰もが、等しく平等に病気の治療を受けることができるという日本の制度は崩壊していくのだろうか・・・？

こんなテーマのアメリカ版の映画がつけられた。『ジョンQ』だ。

<『ジョンQ—最後の決断—』の映画化>

この映画の原作（脚本）は、1993年に書きあげられたキアーンズの『ジョンQ—最後の決断—』とのこと。ストーリーのポイントは次のとおりだ。

心臓疾患で突然倒れた最愛の一人息子マイク。マイクはボディビルにあこがれ、強い男を夢見ていた。ところが、草野球の試合で走る途中、突然心臓疾患のためダウンした。

父親ジョン・クインシー・アーチボルド、通称ジョンQ（デンゼル・ワシントン）も母親デニス（キンバリー・エリス）もそんな息子の心臓疾患など知る由もなかった。

救急車で病院に運びこまれ、数々の検査を受けた後、両親は苦渋の決断を迫られた。すなわち、死の危険を伴った心臓移植手術か、それとも薬による延命治療かだ。マイクが運びこまれたホープ病院の女性院長はレベッカ・ペイン（アン・ヘッシュ）。結構美人で魅力的だが、言うことはキツイ。病院の経営者としては当然のことかもしれないが、日本の病院ではまずお目にかかれないキャラクター。心臓移植手術には危険が半うばかりではなく、莫大な手術費用がかかることを事務的に冷たく説明する。曰く手術費が〇〇ドル、薬代が〇〇ドル、登録料が〇〇ドル、従って合計で〇〇ドルとのことだ。

マイクの母親レベッカ・ペインは「あんたは金のことしか話せないのか！」と悪態をつくが、所詮「この世は金次第」。

莫大な金額に目をむいたものの、現実を冷静に受け止めたジョンQは、当然のごとく、延命治療ではなく、心臓移植手術を選択。そして、「移植費用は問題ない。なぜなら、私は保険に入っているから」と自信たっぷりだ。

しかし日本の医療でも、国民健康保険が使える治療と使えない治療がある。歯のインプラント治療など、よく現実に出くわす問題だ。

<ジョンQの保険は使えたか？>

アメリカ経済の不況の程度が日本と比べてどの程度かは別として、アメリカではジョンQのようなブラック系の人種は基本的に弱い立場。仕事がいっぱいあればいいが、ジョンQも会社の都合で仕事は1/2に。従って、給料も1/2に。すると何と保険の受益も…。「そんなバカな！」とジョンQは怒るが、不服があれば申立は〇〇へと言われるだけ。いかにもアメリカ的。

ジョンQが当てにしていた保険による心臓移植手術の支払は当面ダメとなった。ならばどうするか・・・？

ジョンQは友人からのカンパを集めた。そして家財道具を売った、車も売った。そして指輪さえも売った。しかし手術代は高く、おっつかない。心臓移植のドナー募集に登録する費用すら払えない。

毎日金集めに走り回るジョンQにある日妻からから電話が入った。何と病院は、入金の見込みのないマイクを（強制）退院させるというのだ。

そこでジョンQがとった行動は・・・？

<ちょっとびっくりの展開>

マイクの心臓疾患を知り、その治療法を説明したのは女性院長のレベッカの他、心臓病の権威であるターナー医師（ジェームズ・ウッズ）。彼の説明（インフォームドコンセント）は実に要領を得ているうえ親切、完璧だ。

また、その後のストーリー展開を見ても、このターナー医師は単に権威ある医師であるばかりではなく、人間的にも極めて魅力的な人物だ。自己のドクター生命をかけて、ジョンQの「無茶な提案」をOKし、実行しようとしたのだから・・・。

「びっくりの展開」とは何か？それは、あの働き者で家族愛にあふれ、善良な市民であるジョンQが、何と「病院ジャック」をして、ターナー医師に息子マイクの心臓移植手術を迫ったことだ。

たしかに愛妻デニスから「何とかしてよ！」と迫られ、「俺にまかせとけ」とタンカを切ったものの、ジョンQにはマイクの強制退院を防ぎ、心臓移植手術を受けさせてやる具体的手段は何も思いつかなかった。

そこでジョンQがとった行動は、まず第一にターナー医師への泣き落とし。

つまり、「いくら金がかかってもそれは俺が必ず払う。決してウソはつかない。俺を信用してくれ。そしてマイクの手術をしてくれ」というものだ。

ジョンQのこの話しぶりには十分説得力がある。多分ターナー医師もこれを信じたはずだ。

しかしターナー医師の答えはきわめて合理的かつ理性的なものだった。すなわち「自分は意見を言うことはできるが、決定権は理事会にある」というもの。

もちろんジョンQもこの答えは頭の中では十分理解している。

しかし何としてもマイクに手術を受けさせなければならないジョンQは、もはやどうしようもない。そして、「もう頼まない！」と言って、ピストルを取り出し、ターナー医師に手術の実施を迫ったのだ。

「君のやり方はよくない！」というターナー医師の説得も、今やジョンQの耳には入らない。ターナー医師を「連行する」ジョンQのピストルを見た病院内は突如大パニック。

ジョンQは、たまたまその場に居合わせた数名の医師、職員、患者などを「人質」にこめて、病院の一角に「たてこもり」、「病院ジャック」となったわけだ。

<事態はどんどん拡大—ジョンQの要求は？>

今や病院の周りにはシカゴ市警の警察官で完全に包囲された。そして「見物客」もワンサカ。その中にはジョンQの友人たちもいた。

犯人のジョンQと電話で連絡をとるのは、最近のアメリカ映画でおなじみの「人質交渉

人」グライムズ (ロバート・デュヴァル)。この交渉人は温厚なベテランで、ジョンQと対峙する中で、しだいにジョンQの思いを理解する。

このグライムズの対極にあるのが、シカゴ市警の本部長モンロー (レイ・リオッタ)。エリートで権力志向が強く、イヤな奴。マスコミ受けのために、犯人の射殺体制が整ったところで、「私が指揮をとる！」ときた。そしてグライムズを「解任」し、ジョンQ射殺の命令を発した。

<病院ジャック、ジョンQの生命は?>

ところがこの映画での (に限っての・・・?) シカゴ市警の狙撃班は何ともダラシない。こんなことでは実際に銀行ジャックなどの人質事件がおこった場合、市民は警察を頼ることができなくなってしまうことだろう。

つまり、「モニターで十分チェックをして、ジョンQがAの電話機を取って話しをすれば、狙撃手はBの位置からジョンQを狙撃できることは確実」と判断され、現実はその状況をつくり出しながら、狙撃手は何と狙いをはずして弾丸をそらしてしまい、ジョンQの左肩を負傷させるにとどまったうえ、ジョンQに引きずり出されて、逆に「逮捕」されてしまったのだ。

まあ、このような多少現実離れした展開はありながらも、「病院ジャック」の中での人間模様の展開は実に面白い。途中「解放」された人質はもちろん、監禁されているはずのターナー医師をはじめとする数名の人質達は次第にジョンQの熱い思いとその人間性を理解し、何とか彼の息子マイクの心臓移植手術を成功させたいと願うようになっていった。

この病院ジャック内での人間ドラマの展開が説得力を持つのは、デンゼル・ワシントンの演技とターナー医師の演技によるものが大きい。そしてこれを支えるのが、外部からジョンQと対峙するグライムズ人質交渉人だ。

<ジョンQ「最後の決断」とは・・・?>

ここであらためて整理しておこう。すなわち、ジョンQが「病院ジャック」をしてまで果たそうとした要求は何だったのか?それはマイクの心臓移植手術を実施すること。そしてジョンQの願いはただ一つ。息子の生命を救うことだ。

しかし心臓移植手術は、当然難しい手術。

さまざまな医学的チェックが必要であるうえ、まずは移植に適合する心臓そのものが存在しなければならぬ。そのためには何か月も何年も待つことだってありうる。しかしマイクには時間が残されていなかった。そこでジョンQの「最後の決断」とは・・・?

それは、自分の心臓を息子に提供することだ。つまり「俺は自殺するから直ちに俺の心臓をマイクに!」ということ。

ターナー医師をはじめ周りの今やジョンQに同情的な人質たちは、口々に「それは無茶

だ！」「神の意思に反する！」と説得した。

しかし激論の末、何とターナー医師は「よしわかった！やろう」と決断した。いくら心臓手術の権威でも、一人でこんな決断をすることは無茶だ。医師の倫理基準からみてもどうか・・・？

周りは反対。しかしターナー医師の決断は早くかつ固かった。ターナー医師は何よりもジョンQの意思の強さと人間としての温かさを理解したうえで、自分も人間としての判断に従ったわけだ。

一人静かにマイクに語りかけて別れを告げたジョンQは、いよいよピストルを取り上げた。そして弾丸込め作業。何とこのピストルにはタマは入っていなかった。ジョンQは脅しのためにピストルを取り出しただけで、人質を殺す意思など毛頭なく、もともと自殺しか考えてなかったということだ。そして、静かにピストルの引き金をひこうとするジョンQ・・・。

<味な構成—映画の冒頭シーンの意味>

この映画は、冒頭、一人の女性が運転するBMWが何台も車を追い越しながら急ぐシーンから始まる。そして何台目かのトラックの追い越しの時、対向車が現われた。しかも追い越しをかけられたトラックは減速しない。何とか正面衝突だけはスリ抜けたものの、スピンして横向きになって止まったBMWにこのトラックが激突した。100%死亡事故だと確信するシーン。そしてその後、ジョンQたちの生活がスクリーンに現われてきた。

従って、この冒頭シーンが何を意味するのかさっぱりわからないまま、以後のストーリーが展開されるわけだ。しかし、ジョンQが自殺を宣言するあたりから、この交通事故の様相が時々再現され、被害者の女性が救急車に乗せられるシーンが登場する。

一方でジョンQの手はピストルの引き金に。わかった・・・。この女性の心臓が・・・だ。

これ以上は言う必要がないだろう。

果たしてジョンQは、息子マイクの生命を救えるのだろうか・・・？

<心温まる名作、そしてジョンQの名演技に拍手>

デンゼル・ワシントンは2001年度アカデミー主演男優賞を受賞した、今のりにのっている俳優だ。

この名優の演技が、「ジョンQの決断」というきわめて人間的なドラマの中で光っている。そしてこの映画のテーマはアメリカのみならず、日本でも十分に通用するものだ。

昨日まで元気で一緒に暮らし遊んでいた最愛の息子が、突然心臓疾患を持っていたことがわかり、そのため莫大な費用がかかる心臓移植手術が必要となった。しかし保険が使える

ず、お金が底をついた。このままではムザムザ死んでいく息子を泣いて見守るばかり……。そんな時あなたならどうするだろうか……。？そして私ならどうするだろうか……。？一人一人が真剣に考え、真剣に悩むことが、社会を変えていくエネルギーになるはずだ。

2002（平成14）年9月5日記